

りくの雪の日

辻 憲男（文学部教授）

忠臣蔵は今も年の瀬の話題になるだろうか。赤穂浪士の討ち入りは元禄15年（1702）12月14日、太陽暦の1703年1月30日だった。その直後から、事件と人物はさまざまに脚色され、劇や小説にくり返しつくられた。

りくの郷里は但馬の豊岡である。京極氏の家老・石東家の長女に生まれ、18歳で大石内蔵助に嫁いだ。刃傷事件の時は結婚15年目で、松之丞（主税）を頭に二男二女があった。浪々の身となって、京都山科（やましな）に閑居した。野上弥生子の小説『大石良雄』の場合は、内蔵助は、「仇討ちが一番の忠義だからといって誰も彼も仇討ちをしなければならないわけではない」と考える自由人である。年が改まっても、頑として息子は江戸へは連れて行かぬと言い張った。りくは夫の心底を測りかね、詰め寄った。松之丞も涙をこらえて対座し、背も高いし馬にも乗れると訴えた。…「わかった、松之丞、連れて行く」。その時、息子に劣らず満足して上機嫌になっている妻の白い額を見て、「彼の心は寂しく苦笑した。—この女はおれと息子が討ち死にしたと聞いても、今のとおり涙一つ落とさないでいるだろう」。やがて松之丞は東下した。後難を避けるため、りくは離縁し、幼な子三人を連れて豊岡へ帰った。実家で男子が生まれた。

昼あんどんの内蔵助に対して、りくは貞節の烈女であったのか。討ち入りの夜の江戸は、事実は雪ではなかったというが、豊岡は深い雪の中に眠っていたか。のち三男が広島浅野家に仕えたので、りくもそこで後半生を生きた。



豊岡城のあった神武山（じんむさん）。
建物は豊岡高校内の旧制中学校舎。